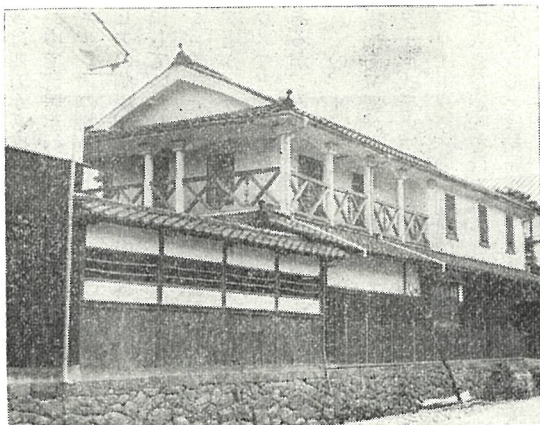




同志社

歴史散歩

三田

鏑木路馬

三田と三田人

『三田はええ町です。本当の平和郷ですよ。そのかわり恵まれすぎるんで、特にえらい人も出ませんが、そんなにひどい人もありませんね。』（『開基新潮』昭和41年10月号41頁）

雑誌『開基新潮』の連載ものの一つに、「真剣置碁道場」というのがあり、十月号には三田の吉川という人が宮本（義）八段に對した戦譜が載っている。この対戦は、現地で行なわれたから、その観戦記は三田の町の説明からはじまる。それは、とても巧みな文章で、ここが、九鬼氏の城下町であり、灘の酒づくりになくてはならない三田米の産地であり、もっとも美味な神戸肉の本場であり、周辺は松茸山にかこまれ……といった土地の紹介がつつけられていて。そして、むすびに、土地の人の言葉として挙げられたのが、冒頭の三田人観である。

だが、この言葉は、「本当の平和郷」の土地の人の謙讓な心から発したものと考えられる。事実、ここは、少くとも、同志社の歴史——とくにその初期の歴史——にとって、忘れがたい幾

多の「えらい人」を輩出した地なのである。

それで、今回の「歴史散歩」は、変わった順序になるが、まず、三田出身の同志社人から筆をすすめようと思う。ただ、三田の説明があとになるので、ここでは「さんだ」とよみ、六甲山地の裏側で、有馬の北部にある山間の町であることをつけておく。

三田と同志社人

『或る時、新島先生が斯う云ふことを云はれた。杉田勇次郎君は珍らしい人物で、何麼困難にも堪へて、鹽を嘗めつつ、勉学する人だ、と感嘆せられた』（網島佳吉談）

元良勇次郎——同志社開校当初の入学者。日本の心理学の創始者。旧姓、杉田勇次郎。杉田家は、代々三田藩祐筆職の家。小禄の家であつたうえ、維新となり、しかも、まもなく父が死んだから、家計は困難をきわめた。同志社時代は、文字通り、「鹽を嘗めつつ」の苦学であつたと思われる。彼が同志社に來たのは、神戸に出て、デビスに師事し、デビスが同志社に参加するにあたり、行を俱にしたからである。彼が同志社を中退したのは、上京

し、津田仙の学農社に勤めたからである（註1）。上京後、元良米子と結婚。これは有名な小崎弘道とのダブル・マッジ。米国留学。哲学・心理学専攻。日本に帰ってからは、東大教授（註2）として活躍。

現在、三田・屋敷町の一角の家跡に記念碑が建っている。

杉田潮一同志社入學は弟より少しおくれたが、元良勇次郎の兄である（註3）。維新直後、故郷三田に帰った著名の蘭学者・川本幸民が、英語塾を名刹・金心寺に開いた時、弟とここに学んだ。その後、彼は大阪に出て、ボード派遣の宣教医・アダムスに師事。入信。浪花教会創立者の一人となる。やがて、同志社に学び、卒業後、各地の教会を牧したが、とくに因縁も深い浪花教会を多年牧して有名であった。一時、故郷の三田教会を兼牧したこともある。

川本恂蔵―三田出身といえは、同志社としては数少い医師の一人・川本恂蔵を忘れることはできない。川本家は、三田藩々医の家。維新ごろの当主は川本泰年―前記の川本幸民は泰年の叔父である。泰年は、明治のはじめ、家族を連れて神戸に移った。そして、神

戸に來たばかりの、ボード派遣の宣教医・ベリーに師事した。この泰年の長子が恂蔵である。彼は、長ずるや、大阪に学んだ。このころ、入信。そして、同志社に転じ、英学校に入る。在學二年目の時―明治十七年、彼二十歳―であるが、その頃、岡山にいたベリーが、新島襄に招かれ、同志社病院創設の協力を約し、諸準備・資金募集を兼ねて、帰米することになったので、彼は、それに随つて渡米した。医学を専攻。帰國後、すでに日本にもどり、同志社病院長として活躍中のベリーを援ける。ベリーが去つた後、同志社病院長。職を辞してからは、神戸に帰り、父の医院を継ぐ（註4）。

竹内雄四郎―同志社病院といえは、その関係者の一人・竹内雄四郎も三田の産である。ただし、同志社出身者ではない。竹内家も、代々三田藩々医の家。父・玄林に連れられ、京都に育つ。ここで入信。明治二十年、同志社病院に勤務。その後、クリスチャンの北海道開拓団として名高い赤心社―三田の人が多いの医師として、北海道に渡る（註5）。

三田中学と同志社柔道部―三田中学は現在の三田学園。三田出身の富豪・故小寺謙吉―

元神戸市長―が、郷里に創設した男子の学校。第一回卒業は、大正六年。その卒業生の一人・園部庸が、同志社に進み、柔道部として活躍して以来、後輩として、熊本栄・猿丸吉左衛門・秋山勝一などが同じコースを歩み、大正から昭和にかけての同志社運動部の声名を擧げた。ただし、猿丸氏は、純粋の三田人ではない。父が養子で、三田南部の人であつた関係から、子弟の教育を三田中学に托したのである。

その後は、三田より同志社に学ぶさした人物もなく現在に至るのは残念である。

三田と三田教会

『当地一体を松山の庄と号す。これを金心寺恩田、悲田、敬田の三田を以つて三田と改む』（金心寺蔵重要文化財・弥勒菩薩像の体）
（内彫刻文 昭和7年修理の際に発見）

兵庫県五大河川の一つである武庫川は、篠山南部の山地に源を発し、狭長な三田盆地を貫流し、六甲山地の東端を峡谷をなして突破、宝塚から平坦地を天井川となつて大阪湾に注ぐ全長七十三キロの河川である。この三田盆

地の南部にあり、盆地の咽喉部を扼する、その首邑が三田の町である。

地名の起りは、諸説多く、屯田説・有馬皇子の御田説・冒頭に引用した金心寺の三田説といった歴史的なものや、武庫川の湿地帯であるから深田だという地理的のものがあるが、「さんだ」とは、どれもすっきりと結びつかない。一応、金心寺の三田説が通説のようである。

三田は、長い間、金心寺の門前町として栄えたが、戦国時代より城下町（註6）に変わり、寛永十年、九鬼氏がお家騒動（註7）により、志摩・鳥羽より移封されて以来、ここは九鬼氏三万六千石の城下町として維新を迎える。ただし、城下町といっても、城はなく陣屋であった。陣屋は町の西部の河岸段丘上にあり、それより一段低い段丘面が屋敷町、そして、武庫川沿いの低地は町屋であった。そして、現在も、他の城下町と同じように、それらは、それぞれ、文教地区・住宅地区・商業地区となっている。この、陣屋跡への登り口に近いところにも日本でも古い教会の一つとして有名な三田教会がある。

三田教会の歴史は、要約すれば、元藩主・

九鬼隆義夫妻が、有馬や神戸で、デビス、ベリイ、ギュリック、ダッドレー女史らの宣教師と親しくなり、三田に宣教師の来ることもあり、明治七年には、ベリイを顧問医師とする洋式診療所が、三田・湯の山町にできた。ここを基地として、伝道が開始され、ついで、その努力は実り、明治八年七月二十七日（公）摂津第三公会が産れた。これが三田教会である。さて、信者は互に助けあい、自分達の力で、教会堂を建設した。それまでの神戸・大阪の教会は、借家のものであったから、これは、組合教会最古の教会堂の榮譽を持つものである。ただ、現在は、改造の跡が著しく、往古のおもかげが、残念ながら、かなり失われてしまった。

明治十年九月七日、献堂式には、新島襄も出席し、司会者として聖餐式を執行している。このような輝かしい歴史を持つ三田教会も、長い間、専任の牧師を持たなかった。この困難な時代に、伝道師として活躍した人に、亀山昇一・熊本バンドの一人 学生時代、三田に伝道し、渡辺源太・三田の人 三田教会の伝道に一身を捧げた 神学速成勉強のため、同志社に三ヶ月ばかり在学しがある。

明治後半から、兼牧者もあったが、本格的に牧師を迎えて以来、現在の萩原猷氏に至る、歴代牧師は、あたりまえのことであるが、ほとんどが、同志社・神学部一時代により、文学部・神学科の人もあれば、専門学校・神学部の人もある一出身である。本来なら、その氏名を列記すべきであろうが、だいたい、紙数を費してきたので、割愛することを赦された。

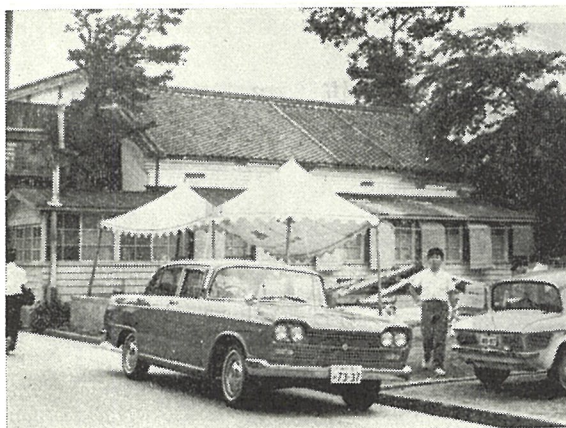
新しい三田

『そこで、わが三田市は、市内のあらゆる組織を結集し、窮極の理念である明るく住みよい福祉都市の建設に、一致団結し、邁進するものである。』（昭和40年9月28日、三田市福祉都市宣言文より）

旧有馬郡は、戦後、南半を神戸・西宮に奪われ、残った北部は、ここに、一同団結して三田町となり、昭和三十三年七月一日より市制を実施した。市政の中心は、いわゆる「三田の町」である。明るい田園都市、「本当の平和郷」にふさわしく、昭和四十年、福祉都市を宣言した。そうした都市につかわしく、こころは、また、私の趣味とする古美術に恵まれている。

古建築も多く、一時、私は狢犬に凝って各地を捜しまわったこともあるが、全国でも数少い重文の狢犬の一对を、ここは持っている(註8)。

しかし、こうした、なんとなく古めかしいものを感じさせる三田市も、ようやく若い新しい三田教会。明治初期の洋風建築の跡がほとんど見られなくなっているのは惜しい。



い都市に移ろうとしていた。すなわち、市の周辺の台地―河岸段丘には、ゴルフ・カンツリーと名のつけられたものが六カ所あり、松茸狩りからゴルフのレジャー・センターへと変った。三田の町も、工場誘致の結果、三菱電気その他の工場に囲まれ、プラスチック機械団地も近くに建設されつつある。

こうした機運の中にあつて、幸いここに難波紋吉氏も移り住んでおられることではあり、進取の気象に富み、笈を負うて京都に來り、同志社に学び往昔の三田出身の同志社人の伝統を、再び受継ぐ青年が、続々現れることを願つてこの稿を終えることにしよう。

見出し写真説明―元藩主・丸鬼氏邸。洋風を一部とり入れた明治初期の建築物。三田教会のすぐ横にある。

註1 新島襄―津田仙の友情から、すでに、中島力造が行っていたが、渡米留学することとなり、その後任として、明治十二年、学農社に入った。

註2 明治二十一年帰国。最初は、文科大学―東大の前身―精神物理学―心理学なるものが日本になかった―講師であった妹は、梅花女学校卒業、長田時行夫人。若くして死去。

註4 夫人は、土倉庄三郎の娘。妹三人は、それぞれ、湯浅吉郎・三宅荒穀・原田助夫人であることは衆知のこと。

註5 明治二十二年、同志社女学校卒業、同窓会選出理事を務めたこともある竹内梅は、その妹と思う。

註6 天正二年、荒木村重の一族・荒木平太夫、はじめて三田に城を設ける。

註7 丸鬼守隆の死後、三男隆季・四男久隆の間に家督相続の争いがあり、幕府は五万六千石から二万石を召上げ、久隆に家督を許し、三田に移封を命じた。その後、寛永十年、將軍家光は隆季を呼出し、新規に綾部二万石に取立てた。守隆の父、嘉隆は、関ヶ原の役には西軍に属したこともあり、水軍の雄・丸鬼氏の勢力をおそれ、うまく、両者に恩を売り、分割して、ともに山間盆地に押しこんだ、幕府のうまい政策にかかったものと思われる。

註8 高平地区・高売布神社蔵。檜材一木造。永仁五年作。本殿も室町時代の重文であるが、後世の手が大分加つている。

(香里高校・教諭)